

	鉄
	道
・	エ
感	ッ
想	セ
文	イ
集	

のちのおもひに

佐藤喜一

45

③ 新宿37期生 卒業三十年祝賀会

2015年6月13日、〈新宿〉37期生の卒業30年祝賀会が開かれた。この学年は、昭和60年（1985）3月の卒業。私は二年と三年とを担任した。ゆかりの深い学年、そして私の教師生活でのクラス担任最後の学年、であった。

かなり早く、B組の友部雅章君から「ご案内」が届いていた。けれどそこには13日（土）午後とあるだけで、場所や時間は明示されていなかった。土曜だから血液透析のある日、でも何とか都合つけて少しでも参加しようと考え、必ず行くから、との返事を出した。

4月に入って時間と場所が届く。15時から新宿の第二武蔵野ビル9F「クルーズ・クルーズ新宿店」とのこと。午前中透析に行き、少し休んで15時ごろ家を出て16時過ぎには着き、お開きまでいようか、と考えてその旨返信した。でも、近くなって、透析後はかなり疲れる、新宿往復に耐えられるかどうか気になる、そこで友部君あてに「15時から参加し、16時過ぎには失礼する」旨のたよりを出したところ、それじゃ最初の「挨拶」と「乾杯」をお願いしますとのこと。引き受けた。

八名のクラス担任のうち、学年担任だった木暮師はすでに逝去、残った七名の中では小生が一番

年輩、とあつては仕方なし、覚悟をした。そうユニークな話はできないけれど、なるべく短かく要領よく挨拶をして乾杯へ、と考えた。そして、そのとおриには話せないとはわかっていても、まずは草稿作り。

何度か推敲して、三枚ほどの挨拶文を作った。左に書いておく。

※ ※ ※

祝 辞

みなさん。卒業30年、おめでとう！

国語の教師、3年E組の担任、佐藤喜一です。久しぶりの同期会にお招きいただき、ありがとうございます！そして、久しぶりにみなさんのお顔を拝見して、若返ったような気分になり、



当時の担任たち

努力の扇を持つのが学年担任。前列右端は司書教諭、後列中央が筆者。

うれしく思っています。

私、みなさんより36年前、新宿高校の一期生として卒業しました。だから、この期の多くの方々と同じ^{うま}午年、です。はたして、ウマが合うかどうかは、わからんけれど。

「論語」の中で孔子様が人間の年齢について、あれこれおっしゃっています。十五歳「志学」から、二十・三十・四十「不惑」、そして五十歳が「知命」、さらに六十・七十、まで。でも、間もなく85歳の私の年齢は出てこない。もう、卒業せよ、ということか。

37回の多くの方々は、数えて五十歳——これは、「天命を知る」年齢ということ。そろそろ「悟り」を開けよ、というようにひびきます。でもね、そう簡単に「天命」を知ったり、「悟りを開く」ことって、できますか？

私も五十歳のこの「知命」の年、いろいろと迷ってました。あの校門から新宿駅への帰り道が、実に遠かった。チャン屋じゃありません。明治通りを右折して、三丁目の方へ行くと、いろいろな関所が多く、そこで煙を吐き、おいしい水を飲み、時々は唄をうたったりして、夜が更けて京王電車の客となる、ということが多かったです！

「天命を知る」なんて、考えてもみなかった。そのせいか、現在、少々病んでいます。けれど悔いてはいません。「夜の新宿 裏通り……」なんて口ずさむと、実になつかしい。

だから、私はみなさんに、「天命を知れ」なんて言えません。むしろ、悟った顔なんかじゃなく、もっと迷ったらどうですか？ と言いたい。何に迷う？ そう、自分の生き様^{さま}がはたしてコレデイ

イノカ、を考えてみることに。

同窓会報「朝陽」に「三十年特集」として、六人の方々の文章が載ってました。みんな文章がうまくなっている、それだけ成長したんだナ、と嬉しく思いました。

代表幹事の羽藤君が、「……人生の折り返し点は過ぎたであろう我々……」と書いてます。そのとおりでしょう。そして今日は、あの若かりし日々を懐かしむ話もいろいろと出るでしょう。それも大切ですけど、これからどのように生きるか、何をしたらいいのかを語りあうことも、けっして忘れないで欲しいナと、年老いたるキイチは願っています。

※

それでは乾杯しましょう！

37回生諸君、卒業30年、おめでとう。これからの人生がよりよきものになることを祈ります。

乾杯!!

この37期生は、大学生時代に一度同期会を開催しただけで、この日まで同期会はなかった。わがクラスの集まりもなし。それは、わがクラスにいた代表幹事の羽藤俊昭君が、大学を了えて商社マンになり、長年外地へ赴任していたり、本社勤めになっても海外出張が多かったので、こうしてのびのびになったのだらうと、私は考えた。

そして、今回は友部君が実にキメ細かく準備を進めてくれ、久しぶりということもあってか、師十四名、同期生一六二名という実に盛大な会になった。

14時30分には会場に着く。幹事はもちろん生徒たちもかなり来ていた。挨拶を交わす。トシ相應の貫録がついていた。だから、名票を見ないとすぐには名前が出てこない。

モト師も次々と集まった。控え室に通されたので、お互いに挨拶を交わす。こちらは名札がなくとも、担当教科や氏名が出てくる。たぶん一番若いのが国語の細谷美代子さん。昭和51年4月、新採用でわが校に着任され、十一年間〈新宿〉におられた。約四十年経ち、この春、最後に勤務していた大学を退官されたとのことだった。

この細谷さん、〈新宿〉在職中二子をもうけた。実に大変だったろうが、いつも笑顔をたたえて、仕事に励んでいた。この方が第二子で産休に入る、だから佐藤さんこの学年に入って！と言われて、私が二年・三年を受け持ったのだった。そして、いろいろな思い出もできた。

祝宴は、ビュッフェスタイル。各クラスごとに円卓があって、そこにA～Hの諸君が集まった。そして、開会宣言など待たずにそれぞれ再会を祝して各テーブルごとに乾杯が始まり、歓談尽きることを知らずという有様になった。私のところにもビールを注ぎにやって来て、久濶を叙す、といった生徒もいた。

15時を過ぎることしばし、やっと開会となった。羽藤君が開会宣言、そして私の「祝辞」となる。すでに静寂さは失われていたから、私もくだけた調子で祝いのことを述べた。原稿どおりにはも

ちろんいかず、原稿にはない、私にも君たちと
同じ年の娘がいること、とか、目下血液透析患
者として週三回、カラダのオキヨメをし、夜に
なるとオキヨメの水を飲んでる、などとも話し
た。「なみだ恋」の一節は、きちんと歌った。

そして、乾杯!!

次に諸先生方の紹介、参加できなかった先生
や亡くなられた先生がスライドで映し出され、
セレモニーは終わる。つづいて先生方を囲んで、
何回かにわたって記念撮影。たちまち、16時は
過ぎた。

私は、後髪を引かれるような思いでそつと会
場を抜け出し、都営地下鉄新宿線新宿三丁目の
駅へと急ぐ。幹事さん二名が老いたる師をガ
ードするように改札口までエスコートしてくれた。
ありがたきかな!

その日のクリニックの「オキヨメ」は、17時



記念写真 (幕が勇ましい!!)

30分ごろを予定していた。そのためには新宿16時30分の特急に乗り、17時少々過ぎにクリニックへ入れば良いと考えていたが、途中、電車がスムーズに動かず、三十分遅れて到着、17時58分血管に針を刺して、沈黙の三時間、帰宅したのは21時50分だった。疲れた!!

ウトウトしながら、あの頃のことをいろいろと思い出す。さしたる事件はなかったけれど、一つだけ恥ずかしいなと思うことがあった。生徒たちには大して気もとめていないことなんだろうが、私たち教師にとっては、いささか恥ずかしくなるような「事件」だった。それは――。

修学旅行へ発ったのは、昭和59年3月14日だった。第一日目は安芸の宮島に泊まり、二泊・三泊目は京都、という旅程だった。

東京駅発7時19分「ひかり511号」に乗るために、東京駅集合は6時30分。前日、卒業式があり、その夜、京王プラザホテルで父母会主催の謝恩会があったので、担任の多くはその夜は東京駅に近いホテルに泊まり、万全を機した。

引率の教師も生徒も皆集まった。でも、一人だけ現われない方がいた。引率の総責任者である校長だった。連絡をとったが、なにかあった様子で、やむなく学年担任（この木暮師だけが、37期の担任の中で一人故人となっている）が部隊長となって出張したのだった。

広島を見学し、夕刻、宮島の宿に着くと、校長はすでに到着して、なにくわぬ顔で私たちを迎えた。詫びのことはもなかった。「無責任な奴!!」と私は思った。

この方は、翌日も生徒と行動をとにもすることなく、自分の行きたいところへさっさと行ってしまわれた。まもなく定年退職。おそらくご自分の「終学旅行」を愉しまれたのであろう。

生徒にはどうってことのない事件、だったんだらうけれど、私たちにとっては恥ずかしくなる事件、だった。だれも面と向かって問責はしなかったけれど。

そういえば、今日の恩師紹介のスライドにも、校長たちはなかった。この学年は十一代校長（修学旅行に遅れた）と十二代校長とを知っているはずだが、出てこなかった。十一代はともかく、卒業証書をくれた校長の名前ぐらい出てもいいんじゃないか、と思ったけれど。

私のクラス3年E組にはいろんな子どもたちがいた。そのひとりひとりとゆっくり話をしたかったけれど、あまりにせわしくて、思うようにならなかった。私は、近いうちにE組だけのクラス会を開けよ、と言っておいたがはたしてどうなるか。

一人だけ、わずかな時間だったけれど話をした生徒がいた。山下敬一郎君。わがクラスでひとり東大に進んだ生徒だ。

かつて私の若かりし頃は、クラスの子の十人以上が東大へ進学したものだが、昭和60年ともなると、クラスで一人が精一杯。一人でも入ればよしであった。

山下君は二年・三年とも私のクラス。母一人子一人という家庭事情も知っていた。進学相談の時、私はまず「将来、何をしてみたい？」とたずねた。「考古学」という答えが返ってきた。私も地方の国立でも考古学のできるころはある。でもこの子だったら自宅から通える大学がいい、「やっぱり東大、ガンバレよ!!」と私は激励した。それだけの力があると思っていたのだ。

山下君、ストリートで見事に文科3類へ合格。今は文化庁に勤め仕事に励んでいる、とのことだった。そう、若い頃は大和地方の遺跡発掘調査などにも参加して、彼の地から手紙をもったこともあったナ、と私は思った。

もうひとり、どうしても逢いたいな、と思う女生徒がいた。でも、欠席だった。生徒たちが「二シゴン」と呼んでいた西平秋子さん。

西平秋子、でわかる人はかなり文学通の方。2006年1月、第134回芥川賞受賞作家絲山秋子さん。まもなく創立百年を迎える〈新宿〉で、多くの文人たちが育ったけれど、「芥川賞受賞作家」はこの子ひとり。大作家を「この子」と言えるのはモト教師の特権としてお許しただきたい。この子、高校時代、いわゆる文学少女じゃなかった。あれこれ言わなくてもきちんと学ぶべきものは学び、ストリートで早稲田の政経へ入った。文学とは無縁そうな会社に入ったが、病を得て静養中に小説を書くことを思い立ち、「文学界」新人賞に応募したらめでたく入賞。作家として一人前になった。卒業後、めったに便りをくれなかったが、この新人賞受賞は嬉しかったようで、長いたよりをくれた。

04年、川端康成文学賞、そして06年は芥川賞、と着々と成熟し、作家としての地位を確立していった。川端賞受賞パーティーはホテル・オークラ、芥川賞受賞祝賀会は東京会館ローズ・ルーム。いずれもモト先生ご招待を受けた。そして、成長したモト生徒と乾杯した。うれしく、愉しきひとときだった。

でも、この日は差しつ差されつというわけにはいかなかった。なぜか、世田谷から群馬県高崎の郊外へ移住してしまったこの作家、そうそう東京に出てくるわけにもいかぬのだろう、私はそう思った。

ウトウトしながらこんなことをあれこれ考えているうちに、三時間のオットメが終わった。何故か腹が減っていた。疲れたナ、というかんじ。久しぶりに夜の盛り場を歩いたが、さっさと歩き抜け、家路へと急いだ。

後日、担当の女医さんが、「パーティーに出てから透析、っていうの疲れるでしょ。次からは曜日をずらせてあげるから、土曜一杯愉しんでらっしゃい。」と言ってくれた。この方は37期生たちよりも少し若い先生。そして父上が大阪の府立高校の国語の先生だったとか。いとありがたきかな。